

() 昭和 年 月 日

昭和二十五年八月十六日付書面に依る市岡合せの元海軍上等
水兵 [] 君に關する件、比律賓郡島ウミヤシ洲北サ

アムンチンド嶺敵のルン島上陸地点でありましたので上陸前空
爆、為同地は全焼したものであります。私は當時キャビデ海
軍基地に居りましたので斷然とは言えませんが其の爲當地の
患者等は戦死者が多い事と思ひます。亦戦死を免れた人
は病人であれば十中八九迄は戦死した者と思はれます。私
共の部隊は海軍百三工部部でありましたが昭和二十一年一月十二日
ごろ、脱走二月一日に北ルン島のソラノ町に到着以後六月五日迄
はソラノ町の北部、四キロの所に滞在食糧の集積等して居り
ました。六月六日に愈々敵が近くに迫りましたので山間に逃
げ込みました。何分、私共の部隊は非戦闘部隊で百三海軍
工部部軍需部建築部、計理部等の職員工員並に海上

() 昭和 年 月 日

部隊の沈没艦艇からの残存で部隊で武器を持にない部隊で
ありまして山に逃げに様々次第です

終戦當時は北ルンニン山中に居りまして昭和二十一年九月

八日に [] (上建並に造船業)は九月十日山を出發せよとの

命令を受けまして九月十日に山を下りまして敵の收容所

に着いたが九月十二日最初の歸還は十一月始めの頃にでせう、

自分等には少しも知れませんでした、又、私共は十二月二十九日マ

ニラ港出、大野に上陸しゐるは十二月四日でした、 收容所は

有様は食事は割合に良い物は貰ひましたが何分量が少なくて

元氣を取りもむすに足らず、又、ありませんでゐ、衛生は特

にやかましく傳染病等は割合にまよせんでした、前から山

で食物不足で病人が多かつたので、死亡者の數は相當多かつた

事と思はれます。

昭和 年 月 日

君の内は私の生れ在所で五軒位しか離れて居るまで
んから私が歸着當時、一應話してはあうますか子をも
思ふ親心で、今でも歸つて来はせぬかと待つて居られる様
です。私が私生活大忙し見込ないでせうと話してはあうます。私
の部も隊名は百三海軍工部部屬院で養仕官待遇を受
けて居る多し。百三工部部内の土木工事、全部と不造船
建造百三建築部、土木工事の一部を受持ちでし各
是れが御同合せに對する市返事であうます。

八月廿二日

鹿兒島縣民生部世話課第二復員科長殿

鹿兒島縣

戰死

豊岡丸に便乗海南島に向ケ航行
中バシ海峡に於て立寄甚沈没の際

比島

申告

就明書

原籍

氏名

出生地

昭和

生

石の省は比島が以て海軍の属として入敵中セテ島支敵
將連中が父海軍の島沖にて米艦隊の掃射の左め
戦死し左事を認めます

連輸五号に便乗

元

現在所

昭和七年四月八日

徳中野民生神世結釋

徳中

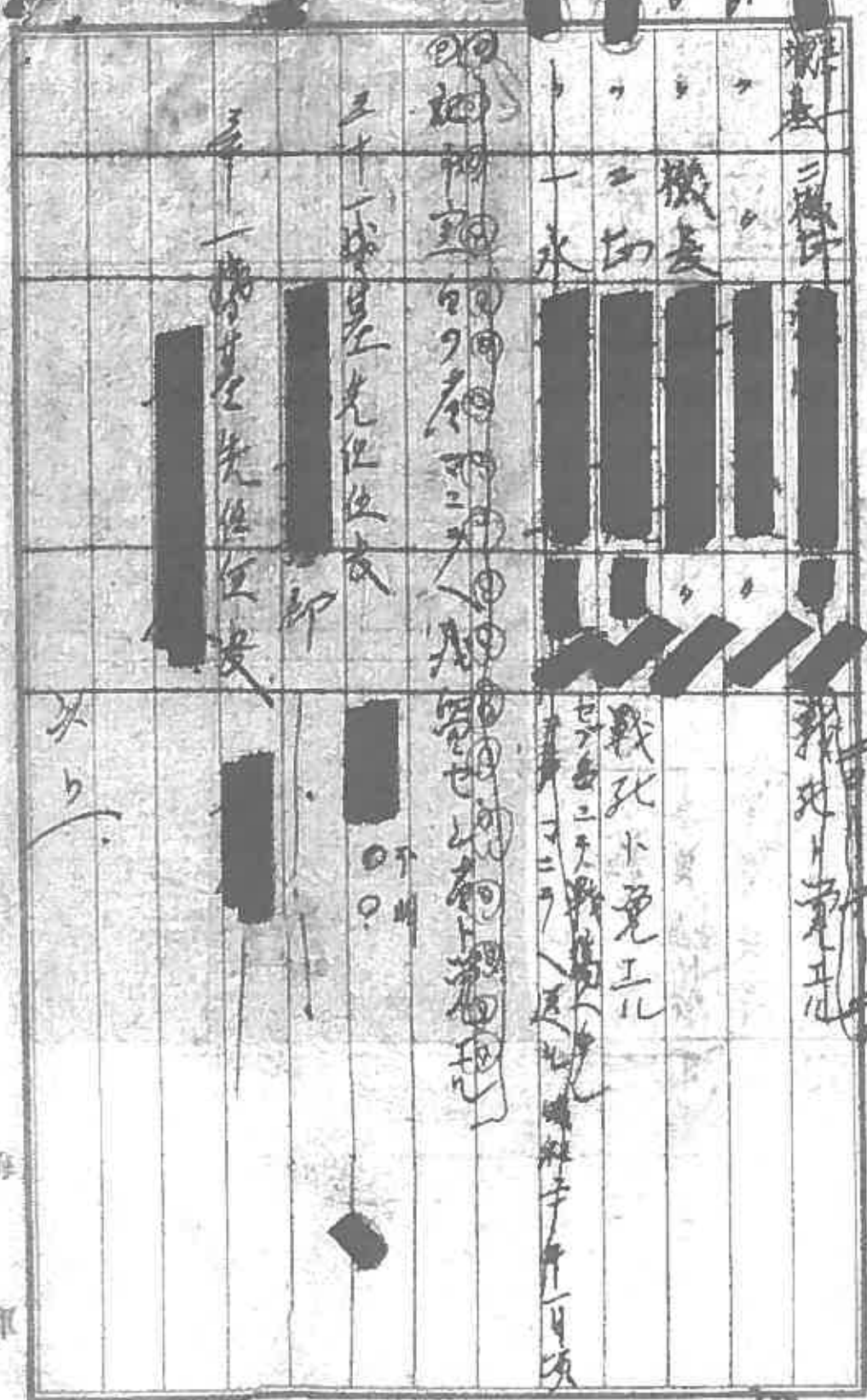
128-12

22-12-17.

[illegible]

海軍

67309 67379 67333



海軍

(海軍省蔵)

700

SECRET

子久

300-70

142

新軍

(英) 對 法 軍 也

昭和二十一年 九月 二日

戦死（戦病死）確認
確認當時ノ所
入籍官職氏名印

軍務
マニラ
運輸部

叙須賀地 次員局人事部長殿

戦死者補給ノ件報告

マニラ 運輸部

戦死當時ノ所
戦死者官職氏名
入籍

戦死年月日時刻

昭和 年 月 日

戦死場所

マニラ川上流 モニタルパシ

戦死ノ場所

戦死、戦病死、戦傷死

戦死ノ状況

マニラより東部岸に転送中飢餓により倒る

遺骨ノ有無及内地送還ノ方法 報告し得ず

戦死者本籍地

（判明又ハ記憶スル程度ニテ可）

遺族住所又遺族氏名 本籍地に於て

（死）



我雖處若輩但當時人所藉

解

漢領事地方復興局人事部長

戰後望確四ノ待嶽堂

一、吸痰者應時時所轉

入學
籍貫
宮氏
姓名

一、職役年月四時刻

一、眼、皮、屈、所

一戰，幾分

眼
酸
狀
况

一、雷少卿

一、曉眾皆本極地

一、家族住所又ハ源朝氏名

アゴス川上流モントルバン山中

腹死
 眠病死
 朝露死（アサナリシ）
 朝露死（アサナリシ）

東海舟に転落中
飢餓により倒る

方諸敘客已得

(別紙)

申告者

所轄

(現住所)
(連絡先)

等級

氏名

入籍
登録

整理
番号

等級

氏

名

入籍番号及び
入隊願年月日

在籍鎮守府
(軍部は
派遣の府)

最後
部隊名

出身
縣

入隊部で判つてゐないと思はれる戦死者
行方不明等の状況(月日を記すこと)

(記載例)

水長 山本 一郎

横志水
一五七〇七

横 鎮

一六
防空隊

岩手縣

私は一六防空隊に属し二十年一月十日
吳發「マニラ」に向け航行中二十年一月二
十日「マニラ」沖に於て雷撃を受け東洋丸
は沈没した。私は翌日、二十一日(六〇)
一號輸送艦に救助され「マニラ」に運ばれ
三十一特根に假入隊した
上記の者は東洋丸に乗船してゐたから多
分その際船と共に戦死したと考へる

水長 山本 一郎

横志水
一五七〇七

昭和二十年一月十日
吳發「マニラ」に向け航行中二十年一月二
十日「マニラ」沖に於て雷撃を受け東洋丸
は沈没した。私は翌日、二十一日(六〇)
一號輸送艦に救助され「マニラ」に運ばれ
三十一特根に假入隊した
上記の者は東洋丸に乗船してゐたから多
分その際船と共に戦死したと考へる

トハ一八船の船主となり
 軍人友友那人者。と云いに
 同船一八島沖福岡航路中、
 友那人船主が其度軍人に買収
 され同船長[]友日本人は朴親
 王、死体は海中に投ぜられ、
 トハ一八船帰港后友那人を引致取捕
 せ追放し、この石北境を自国せり
 此の縣に状況は當時より、[]
 []より北に直接[]
 のことを詳細に述べられ、
 豊後県北無大に行けり、
 公武友友及上軍官等類は、
 全部没収され一切米穀類と有り、
 冷たの事は、復々[]
 家族に申述べてあり、
 (効)

十月十五日送付

石世二集第二點ノ一九

軍人協會主編第三十一號

石州地方世話部第二模範校

[illegible]

爾考

「十月、延八月「マニラ」到着時一一六防空段（隊長韓大尉）村二〇四名であった

原在江口人舟

合計二〇〇名位は戦死した

「始め第一「ニコラス」飛行場にて配属され（現地戦線直下非島嶼に墜入）十九年十一月頃三
一艦根に墜入、二〇年一月八日「カラバオ」島（「コレヒドール」島の南、マニラ湾口）に
到達した。■隊の外に■隊、■隊（何れも敵艦）があり合計四五〇名位であつた
二〇年三月五日蘭軍に向ひ「カラバオ」島脱出戦車の流撃隊とも合し「マニラ」街を越
て「キール」街突撃出来ず八〇〇高地に立籠つた。合計一三〇〇名位が蘭軍は約四五〇
名であつた

二〇年十月二十日下山投降した

「マニラ」島は蘭軍合せて二〇〇名位の生存者があつた（二艦からの
消息（生存者約三〇〇）と符合した）

「マニラ」方面消息は約一八〇〇名位と推定する（二艦からの情報とも一致す）

大東亞戦争は蘭軍を約一五〇〇名位と推定する

二艦は「一六」部隊、三二部隊関係者の消息調査をせしめると言つてゐる

(三)

總付生

二艦連隊部隊関係在外の監視班
二艦連隊内南方面部隊監視班
二艦連隊下各連隊第二後員隊